

主題：「介護福祉教育に求められる日常生活に対するアプローチについて」

—副題：「生の構造」の考え方を通して—

○ 鴻池生活科学専門学校 氏名 多田 千治 (会員番号 003064)

キーワード：日常生活、生の構造、自己覚知

1. 研究目的

近年、わが国においては、2008年4月に厚生労働省から示された「介護福祉士養成課程における教育内容の見直しについて」が示され、その中で、新しい養成カリキュラムに基づく教育がスタートし、介護の専門技術を学ぶ「介護」に加え、教養や倫理を養う「人間と社会」や介護に関わる知識を学ぶ「こころとからだのしくみ」の3領域となり、2011年(平成23年)からは、医療的ケア(客痰吸引と経管栄養)が加えられ、介護福祉士養成施設の教育カリキュラムとして50時間の追加決定も行われ、4領域での合計が1850時間の教育時間となっている。その4領域についての説明の中で、領域介護は、その人らしい生活を支えるための必要な支援者としての専門的技術や知識を学ぶ科目であるとされている。さらに、教育内容の見直しの基本的な考え方として、厚生労働省は、領域介護を尊厳の保持や自立支援の考え方を踏まえ、生活を支えるための介護を学ぶ科目であるとしている。実際、教育に含むべき事項には、生活という文字が多く見られるが、介護という方法を用いて支援するという視点からすると、その範囲が規定された法律や条文が見当たらないことに私自身は疑問を感じたのである。

私自身は、現在、介護福祉士養成施設の教員であるが、近年、施設実習において、介護計画やケアマネジメントに取り組む学生の姿を見て、利用者に関する過去・現在・未来の姿を正確に把握できていないと多く感じた。実際、利用者本人が本当に望んでいることなのかという点(本人の主訴)を正確に理解できず、計画の実施を優先して、学生自身ができることを押し付けてしまっていないかという教員側としての不安を持つこともあった。このような経験から、教員として、日常生活とは何であるかを学生に正確に伝えられていないのではないかという疑問を感じたのである。

今回、「生の構造」という考え方に注目し、今後、学生が日常生活への理解が深められる教授法を探す手がかりとしたい。

2. 研究の視点および方法

- ・生活を捉える1つの考え方である「生の構造」を紹介し、学生が日常生活に対する理解を深められる教授方法への示唆を明らかにする。

3. 倫理的配慮

- ・本研究については、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて行うものとする。
- ・本発表に関する資料に関する引用については、原点主義を徹底するように努める。

4. 研究結果

介護福祉に関する文献からは、日常生活の捉え方を見い出すことができた。中島紀恵子氏は、人間の生活行動は、生物学的基盤の上に、学習によって身につけた文化を用いることで成立しているとしている。例えば、食事を例とすれば、食事動作や摂食行動のみを介護の範囲とせず、介護専門職が生活の全体像をとらえる観察眼を身につける必要があるとしている。そして、介護専門職が行う生活の支援とは、生活行為の介助にとどまらず、生活習慣が身につけられ応用されてきた背景まで把握した上で行われるべきとし、生活の全体像の大きさを示している。＜参考文献(2)参照＞

本名靖氏は、日常生活の捉え方が一定ではないことが介護技術の相違を生む原因であるとし、介護が日常生活動作の支援にすり替えかれがちであるが、その理由は、単純に日常生活だけを生の構造から切り取り、単独に援助しようとするからだとしている。食事や入浴という日常生活が食事および入浴動作の支援に変わること、介護が誰にでもできるという誤解を生んでいるとしている。そして、同氏による「生の構造」についての提示を行っている。同氏によると、目に見える客観的生の中で、「日常生活(日々の諸活動)」を中心として、「生命維持活動」と「社会参加・人生」は、相互に影響しあい、目に見えない「主観的な生(精神世界)」とも密接な関係があり、日常生活については、生命活動・社会活動・こころの世界という大きな広がりで見える必要性を示している。＜参考文献(3)参照＞

本名氏が「生の構造」の参考としたのは、上田敏氏による「生の構造」である。同氏は、「生」を主観的・客観的という二つの構造に分け、「客観的生」は、生物レベルの「生命」・個人レベルの「(日常)生活」・社会レベルの「社会生活・人生」から成り立ち、「主観的生」は、実存レベルの「体験としての人生」から成り立つとしている。＜参考文献(1)参照＞

5. 考察

介護専門職が行うべき支援を考える上では、「生の構造」の理解が必要である。日常生活における動作の支援という狭い範囲ではなく、その動作が身につけられた背景まで理解できる援助者としての広い観察眼を持つことが重要である。そのためには、職員になる前の実習生の立場から、その理解を深める必要がある。さらに、社会・個人・実存という3つのレベルから日常生活を捉えることで、今までの自分自身を振り返る援助者の自己覚知の効果も期待できる。その意味からすると、日常生活は、同じではなく、年代や環境によって変化する文化的な一面を持つことを講義の中で学生に体験し、理解させる取り組みが必要であると私は考える。

○参考文献

- (1) 上田敏氏『リハビリテーション医学の世界』三輪書店、1992年
- (2) 介護福祉士養成講座編集委員会編『介護福祉士養成講座⑫介護概論』中央法規出版、1988年
- (3) 西村洋子・本名靖・綿祐二・柴田範子編著『⑧生活支援技術Ⅰ』建帛社、2009年